

2025 年度

里親養育包括支援機関（フォスタリング機関）事業報告

1. はじめに

今年度はメンバーの入れ替わりを機に、組織の理念や行動指針、情報共有のあり方を再定義する重要な年度となった。各職員が役割を主体的に担い、新たなメンバーの視点も加わって意見交換が活性化している。個々のケースワークにおいて、専門的な提案ができるようになった点は大きな成長である。

ふおすはっち（八王子フォスタリング）では、5月中旬まで産休前の引継ぎ期間を含め9名でスタートし、最終的には8名体制へと移行した。特筆すべきは、職員の半数が立川フォスタリングの立ち上げメンバーとなったことである。この編成は「経験知の深化」をもたらし、迷いが生じた際も先行事例を参考に支援の厚みを増すことが可能となった。一方で、八王子と立川の細かな運用ルール之差による「文化の摩擦」も顕在化した。勤務表作成プロセスなどの不平等を解消するため、今後は合同会議を通じて運用の擦り合わせを行い、統一した対応を検討することが課題である。業務環境においては、6月の町田児童相談所開設が大きな転換点となった。これまで混在していた八王子・日野と町田のやり方が一本化され、児相の福祉司や専門員との連携が円滑化。業務の迷いが払拭されるとともに、担当家庭数が適正化されたことで、より丁寧な訪問が可能となった。今後は、里親や委託児童との対面機会をさらに増やし、些細な悩みも気軽に相談できる信頼関係を構築していく。

ふおすたっち（立川フォスタリング）とふおすはっち（八王子フォスタリング）間の業務標準化については、議論の時間が不足し次年度への持ち越しとなったが、職場環境の改善や処遇面も含めた検討を進める方針は確認された。今後も、蓄積された経験を糧に、児童相談所との連携を深めながら、質の高いフォスタリング業務の確立を目指していく。

2. 運営

1) 会議

①立川フォスタリング

立川・八王子フォスタリング合同会議は、普及啓発活動等との日程重複により、計画していた年4回に対し実施は3回に留まった。回数自体に不足はなかったものの、事前の準備不足から議論が深まりきらなかった点や、本院職員の参加を十分に促せなかったことが今後の課題である。

一方、週1回の全体ミーティングは情報共有の重要会議として定着した。欠席時の報告や記録確認が徹底され、持ち回り制による簡潔かつ具体的な議事録作成も運用されている。会議の冒頭では「こころかるた」を用いたアイスブレイクを取り入れ、相互理解の促進に努めている。また、チェックリストを通じて一部職員が心理的安全性を脅かされている現状が可視化されたため、匿名性を守りつつ互いの発言に配慮し、安全な対話環境の確保に注力した。今後は、限られた時間内でのさらなる効率的な運営と、全員が安心して発言できる場づくりの両立をより一層意識していく必要がある。

②八王子フォスタリング

週に一度のフォスタリングミーティングでは、ケース共有や運営検討を継続した。司会や書記などの輪番制は定着したが、役割の理解深化やスキルアップのため、役割固定期間の設定など次年度に向けた運用再考が課題である。レジュメに基づき会議を進める流れは定着しており、今後は参加姿勢の向上も目指していく。

児童相談所との全体ミーティングでは、事前レジュメの共有により、意見交換や提案が円滑に行えるようになった。今年度から議事録作成をフォスタリング側が担う体制に変更したが、さらなる効率化の余地がある。各種ミーティングの記録は共有フォルダで管理しているが、今後は連絡会や研修の報告を全体共有する場も設ける方針だ。

里親との連絡調整や訪問記録については、迅速なシステム入力を心掛けているものの、リアルタイムでの記録が困難な場合もあった。今後は、情報の網羅性を維持しつつ、より簡潔で分かりやすい記録内容の追求が必要である。

2) 職員研修

①立川フォスタリング

質の向上研修に、最低1回は参加することとしたが、後半に参加が集中してしまい、児相の席を空けてしまうことになってしまった。次年度は希望を募った上で、勤務状況を考慮しながら統括が参加を調整することとする。チームへのスーパーバイズは、ふおすはっちと合同の研修を1回行ったのみであった。

②八王子フォスタリング

今年度は櫻井奈津子 元和泉短期大学児童福祉学科教授をスーパーバイザーに迎え、年3回のSVを実施した。里親支援全般、家庭復帰の事例検討、面接のポイントなど、実践的な助言を通じて基本姿勢や児相との連携を再確認し、業務改善を考える貴重な機会となった。

東京都の職員質向上事業には、見学会や事例検討を含め全員が1回以上参加できた。個人研修についても希望者の多くが受講できているが、参加状況には個人差がある。全く参加していない職員も一部見受けられるため、次年度は全職員が最低1回は外部研修へ参加できるよう促し、組織全体のスキルアップを図ることが課題である。

3) 法人内他部署との協力連携

①立川フォスタリング

年末年始の本院での勤務では、ふおすたっちもユニットに入ることによって、乳児院を知るきっかけになったのではないかなと思う。里親委託を検討したい子どもに直接接する機会にもなって良かった。反対に、乳児院の職員に里親さんの養育体験を聞いてもらう機会を作ることができた。

②八王子フォスタリング

今年度も事務職員と日常的に連携を図り、ICT関連や費用面などで多大なサポートを受

けた。特に普及啓発活動では、事務長のアドバイスにより質の高い啓発グッズを作成できた。勤怠書類等の提出期限をチーム内で明確化したことで、迅速な事務処理意識が定着した。

本院とは研修会場の提供や実習受け入れ等で協力体制を維持した。年末年始の院内勤務では、乳児院の生活への理解を深める貴重な機会となり、より積極的な現場介入を望む職員の声も上がっている。また、社会福祉士実習生に里親支援の現状を伝えるなど、対外的な普及にも貢献した。

立川フォスタリングとは、役割ごとの情報共有や日常的な相談が円滑に行われている。本年度は合同ミーティングを2回実施し、特に次年度の合同年間計画について具体的に協議できた。今後も各部署・機関との相互理解を深め、より強固な協力体制を構築していく方針である。

4) 関係機関（立川児相、里親会等）との連携・協力について

①立川フォスタリング

児童相談所との連携においては、事務所との2拠点体制となったことを踏まえ、よりきめ細かなケース共有を意識して取り組んだ。子ども家庭センターに対しては、年度当初に普及啓発担当と親担当福祉司で訪問を行ったものの、得られた情報の活用に課題が残り、親担当が個別に対応する場面も見られたが、養育体験発表会は実施場所が2か所増加し、特に日の出町では大規模なイベントとして開催することができた。

②八王子フォスタリング

児童相談所との連携では、調整員・推進員を中心に滞りなく業務を遂行した。週1回のミーティングで意見交換を重ねることで、ケースワーク力の向上と強固な協働関係の構築が進んだ。東京都への報告や期限遵守も徹底している。東京養育家庭の会みどり支部とは、フォスタリングが主体となり親子イベントや「こどもスペシャル」を企画・実施したほか、広報協力の体制も模索した。

子ども家庭支援センターとは、担当者の継続により八王子市・日野市ともに連携が円滑化した。八王子市とはイベントでの協力、日野市とは会場確保の依頼などで良好な関係を維持している。養育体験発表会は、コーディネーターとリクルーターが中心となり、各市との緊密な調整を経て実施した。

年度途中に開設された町田児相フォスタリング機関（キアセット）とは、書面と口頭による丁寧な引き継ぎを行った。みどり支部が2児相にまたがる形となったため、サロンや行事は合同で開催し、随時連絡を取り合う協力体制を整えた。

3. 個別の事業の実施について

1) 統括責任者

①立川フォスタリング

行動指針の事務所掲示により意識付けを図ったが、今後は定期的な自己評価による振り返りの機会が必要である。効率的な働き方については、時差出勤の活用で超過勤務抑制の意識は高まったものの、職種間の業務偏重には改善の余地がある。「他者に任せる」意識

の醸成や、曖昧な直行直帰ルールの本院との統一が課題として挙げられる。

乳児院里親チームとの連携は、制度説明会や年末年始のユニット勤務を実施したものの、意図が十分に伝わらず一時的な交流に留まった。フォスタリング職員が乳児院の一員であるという自覚を深めるためには、法人の理念や事業の意義を再確認し、指示命令系統を明確化して業務を標準化することが不可欠である。

また、人材の定着に向け、職場環境や処遇の改善案を検討し、法人へ働きかけていく必要がある。今後は、根本的な事業目的の理解を土台としつつ、組織としての連帯感と安定した運営体制の構築を目指す。

②八王子フォスタリング

サロンや研修は、町田フォスタリングや推進員・トレーナーと連携し、大きな問題なく遂行した。年度途中のトレーナー退職後は、会場確保から講師連絡まで代行し、計画的に進めた。業務進捗は日々の対話に加え、週2回の会議で全体共有を図っている。会議では児相への提案や意見発信を行い、協働体制の構築に努めたが、チームワークや理念への立ち返りには依然として課題が残り、次年度の工夫が必要である。

提出物に関しては、育成支援課や本院への期限遵守を徹底した。里親子との関係づくりでは、職種を問わずサロンや研修へ参加する体制を整え、対面機会を創出している。しかし、依然として相互の認知不足を指摘する声があるため、広報誌でのコラム連載などを通じ、引き続き周知に努める。

勤務管理は、月初の希望聴取と SNS での仮表確認を経て調整するフローを確立した。業務上の変更にも柔軟に対応しており、円滑なシフト運用を実現している。

2) 里親制度等普及促進・リクルート事業（里親リクルーター、区市町村連携コーディネーター）

①立川フォスタリング

今年度は「各自治体で1家庭以上の養育家庭増」を目標に、里親制度のハードルを下げる普及啓発に注力しました。

地域イベントへの参加や、ロゴ・キャラクターを活用した統一感のある広報、SNS やラジオ等のメディア連携により、親しみやすさを醸成。特にファミリー・サポート・センター等の対象を絞った出前講座は、具体的な相談に繋がる有効な手法となりました。体験発表会ではインタビュー形式の導入や著名人の起用で「特別な人ではない里親像」を伝え、施設職員や住民の理解促進を図りました。

一方で、広報の遅れや地域による参加率の偏りが課題として浮き彫りになりました。今後は、準備に多大な労力を要する不特定多数向けのイベントを精査し、費用対効果を重視。「数をこなす広報」から、ターゲットを絞り確実に新規登録へ繋げる「質の高い広報」へと転換し、より実効性の高い基盤づくりを目指す。

②八王子フォスタリング

今年度は、里親の新規開拓と理解促進を目的に、多角的な普及啓発活動を展開した。

大学や保育園、弁護士会などの関係機関へ出前授業を実施し、次世代や専門職への周知

を図った。特に日本工学院八王子専門学校とのコラボでは、学生が制作したポスターや里親の葛藤と喜びを描いた4コマ漫画をSNSで発信し、視覚的な訴求を強化した。また、商業施設やプロスポーツ試合でのイベント、保育園行事へのキャラクター派遣など、地域に根ざした活動を継続し、相談ブースには複数の家庭が訪れた。

個別・集合型の説明会を並行して行い、多くの世帯が申請に向けた具体的な一歩を踏み出した。体験発表会では、里親や元委託児童の生の声を届けることで、来場者から「家族の絆を感じた」等の高い評価を得た。

イベントを通じ、事前告知の重要性が浮き彫りとなった後は費用対効果を精査し、SNS有料広告や交通広告の活用、ポスティングエリアの限定など、戦略的な広報へシフトした。

また、マナー化を防ぐ企画の刷新や、単身者で希望する方への協力体制の検討を行い、より確実な里親登録へと繋げていく

◆年間活動

項目	立川フォスタリング	八王子フォスタリング
広報宣伝・イベント	17回	14回
配布グッズ等	ボールペン 250 個、バッグ 250 個、ティッシュ 1,500 個、風船 1,500 個	グッズ約 270 個、チラシ約 5,700 部
関係機関向け出前講座・研修	17回	7回（160名）
関係機関訪問	13か所	5か所
登録希望者向け制度説明会	31回（53名）	33回（56名）
大学等での制度説明（出前講座）	なし	4回（205名）
養育体験発表会	10回（252名）	2市（114名）
個別相談	18回（29名）	31組（52名）
HP・ブログ投稿	不定期	20件
Instagram・X投稿	X(旧 Twitter)86件	Instagram 投稿 68件

3）里親研修・トレーニング等事業（里親トレーナー）

①立川フォスタリング

里親の資質向上を目指し、多様な研修を企画・実施した。

法定研修に加え、ネットリテラシーや性教育、愛着障害といったニーズの高いテーマを扱った。新規登録家庭の参加率は高く、グループワークを重視した内容は好評を得ている。一方で、全体的な集客には課題が残ったため、次年度は利便性向上のため Google フォームによるネット申し込みを導入する。

運営面では、昭島市児童センターを拠点としつつ、アクセスの良い代替会場を確保した。反省点として、登録後研修の案内漏れや施設実習の調整における不手際があったため、次年度は年度初めからの早期連絡と実習フローの再確認を徹底する。

また、5年ごとの登録更新を迎える家庭や、管内1組目となる専門養育家庭の更新研修

についても、対象者と相談しながら早期に準備を進め、確実な受講と質の高い支援体制の維持を図る。

②八王子フォスタリング

今年度は新規登録の減少により一部の研修が中止となったが、更新期間の延長に伴い「その他の研修」を年3回計画し、ネットリテラシー等の今日的なテーマを提供した。当初、研修と交流会を同日に詰め込んだ日程には負担感の声もあったが、午前開催への変更後は研修後のランチ等、里親同士の自主的な相互交流を促す場としても機能した。

会場確保では、日野市での早期予約や至誠大空の家での更新時研修実施など、施設との新たな連携が進んだ。これにより施設見学の機会も創出でき、今後の協力体制の基盤となった。運営面では、配布資料の誤渡し等のミスをダブルチェックの徹底で改善し、トレーナー退職後もマニュアル活用により円滑な執行を維持した。

次年度は、参加率向上のため推進員と協力した個別アプローチを強化する。また、今年度実施できなかった未委託家庭への個別研修についても、レスパイト等の状況を踏まえつつ、計画的に実施することを目指す。

◆研修開催実績

	立川	八王子
登録前研修	4回	3回
更新時研修	0回	1回
登録後研修	1回	3回
受託後研修	2回	2回
乳児委託研修	2回	4回
専門養育家庭更新時研修	0回	0回
障害児委託推進研修（合同開催）	1回	1回
その他の研修	—	3回

4）里親委託推進等事業（里親等委託調整員）

①立川フォスタリング

新規登録の推進では、10家庭のインテークを行い、うち9家庭を研修へと繋げた。養子縁組希望者に対しても、家庭状況に応じて養育家庭との二重登録を促し、活躍の場を広げる工夫をした。また、虐待経験のある希望者には複数回の面接を重ね、児童相談所と連携したサポート体制を構築するなど、個別に丁寧な対応を実践した。

制度改正や業務拡大への対応では、登録期間の5年更新を円滑に周知したほか、本格化したマッチング支援では8家庭中6家庭を担当した。長期の交流支援において、些細な会話の重要性を見落とし対応が後手に回った経験を反省点とし、今後は委託後を視野に入れた支援の質を高めていく。

多忙時の情報共有に課題を残したものの、研修面では役職を超えた提案を行い、里親養育の充実に寄与した。次年度は、マッチング支援の経験を活かすとともに、フォスタリン

グ内での迅速な情報共有を徹底し、より組織的かつ効果的な支援を目指す。

②八王子フォスタリング

昨年度から今年度上半期にかけては、約 100 名の自立支援計画作成や転居調査、町田児童相談所の開設に伴う引継ぎ業務が重なり、多忙を極めた。特に 2 児相分の登録・更新手続きが重なった時期は、日程調整や事務作業が煩雑化し、業務負担が非常に大きかった。

しかし、7 月以降は引継ぎが一段落し、本来の役割であるマッチング支援に注力できる体制が整った。今年度は 3 家庭の交流支援を主担当として担い、候補児童の紹介から委託に向けた一連の業務を遂行した。10 月以降も新たな交流開始が見込まれており、マッチング業務の定着が進んでいる。

後半は児相側との役割分担を明確化したことで、効率的なスケジューリングが可能となった。今後は、宿泊研修や東京都の専門研修へ積極的に参加し、アセスメント能力の向上を図る。来年度も引き続き、質の高いマッチング支援を目指し、自身の専門性を高めていく。

◆年間活動実績

新規里親登録件数

区分	立川	八王子
養育家庭	3 家庭	4 家庭
親族里親	0 家庭	0 家庭
養子縁組里親	1 家庭	1 家庭（二重登録）

登録更新手続

区分	立川	八王子
養育家庭	0 家庭	3 家庭
専門養育家庭	0 家庭	2 家庭
養子縁組里親	0 家庭	0 家庭

マッチング支援

区分	指標	立川	八王子
養育家庭	候補児童数	10 人	47 人
	選定家庭数	3 家庭	6 家庭
	委託数	3 人	3 人
養子縁組家庭	候補児童数	42 人	80 人
	選定家庭数	4 家庭	5 家庭
	委託数	4 人	4 人

自立支援計画書作成

項目	立川	八王子
対象家庭数	49 家庭	67 家庭
対象児童数	85 人	75 人

5) 里親訪問等支援事業（里親委託等推進員）

①立川フォスタリング

里親相互交流の充実では、養子縁組サロンを年3回実施した。外部講師の起用により運営が円滑化し、里親同士の絆も深まったため、次年度も継続する。養育サロンのスポーツ大会は好評を得たが、企画したカレー作りは時期や場所の影響で中止となった。今後は里親の意見を反映し、開催時期や内容を精査する。

支援体制では、定期連絡や適宜訪問を通じて里親のニーズを把握し、関係機関とのケース会議やレスパイト支援へと繋げた。マッチングにおいても、委託後を見据えたアセスメントの強化を図る。

組織運営では、推進員間の物理的な連携の難しさを補うため、情報を統括へ集約する体制を構築した。これにより担当不在時も円滑な支援が可能となった。今後は目標を「統括を中心にケースを集約し、繋がりのある支援に努める」等へ再編し、会議を通じた職員間の情報共有と共通認識の醸成を徹底し、一貫した支援体制を目指す。

②八王子フォスタリング

今年度は推進員2名体制が安定したことで、業務効率が大幅に向上し、きめ細かな支援が可能となった。町田フォスタリングとも協力体制を築き、里親と児童双方に資する活動を展開した。

具体的な活動として、新規委託や一時保護ケースへの様子伺い訪問を重点的に実施。学校訪問は2月完了を目指し進行中である。未委託家庭への働きかけでは、レスパイトや措置委託への結びつきという成果を得た。サロン運営では、ボウリング大会や映画上映会など家族で楽しめる企画が好評を博したが、今後は「大人のみで話せる場」へのニーズにも対応していく。

また、障害児里親支援として放課後等デイサービス事業所との連携を開始し、専門機関と顔の見える関係を構築した。さらに、乳児院での養育体験がレスパイト受け入れに繋がるなど、体験機会の有効性も確認された。次年度は、利用が減少した育児家事援助や、増加傾向にあるレスパイトの積極的な利用勧奨を行い、里親の負担軽減を一層推進する。

◆年間活動実績

項目	立川フォスタリング	八王子フォスタリング
家庭訪問	109 回	—
学校訪問	11 回	43 回
未委託家庭への定期巡回訪問	1 回	16 回
里親等の相互交流	9 回	11 回
養育体験	2 回	1 回

状況確認の頻度（家庭訪問、電話連絡等）	—	166 回
電話相談等	857 回	—
障害児里親等支援体制強化事業	9 件 通院同行 関係者カンファレンス 放課後等デイサービス	11 件 放課後等デイサービス 事業所の見学・情報共有
育児家事援助者派遣	16 回	11 回
レスパイトケア事業の実務	22 日	27 回
里親カウンセリング	4 回	10 回
一時保護委託の調整・支援	5 回	42 回
親子の再統合に向けた面会交流支援	22 回	7 件

6）養育家庭等自立支援強化事業（自立支援相談員）

①立川フォスタリング

今年度は中高生の里子とその里親に対し、進路や自立支援に重点を置いた情報提供と相談援助を行った。

主な活動として、高校2年生への奨学金制度の説明や、八王子と合同での「お金にまつわる勉強会」を開催した。また、中高生サロン「自分を知ろう」ではNPO 法人と連携し、自己適性や職業選択について考える機会を設け、中高生9名が参加した。自立援助ホームの見学会では、措置解除後の居住先としての理解を深める場を提供した。アフターケアについては、居住費支援利用者等に対し、生活・就労支援や奨学金の資金計画策定を実施。連絡が困難な対象者には元里親と連携して対応した。

課題として、担当者交代に伴い顔合わせが未完了の世帯があることや、イベント参加者が固定化・少数化している点が挙げられる。次年度は未面会の世帯への積極的な訪問に加え、広範な周知による参加者の拡大と、進学者以外のアフターケア対象者への支援機会の創出に努める。

②八王子フォスタリング

フォスタリング業務受託2年目を迎え、各養育家庭に各職種の役割が浸透した。今年度は町田児童相談所の設置に伴い、丁寧な引き継ぎと顔つなぎを最優先した。分離後も対象者数は依然として多く、他職種との情報共有を図りながら優先順位を見定めた訪問・面接を実施した。

自立支援では外部団体との連携を深め、中高生向けサロンや自立援助ホーム見学会、合同自立支援サロンを開催した。ケアリーバー支援においては、就労支援同行や弁護士相談、行政窓口への接続など多角的に対応したが、連絡が途絶えがちなケースや、実親との交流後の心情整理に時間を要するケースもあり、関係構築や家族関係調整の難しさが浮き彫りとなった。

連絡手段はLINE が定着し、写真等による近況報告が増加している。若年層の生活スタイルに合わせた文面での相談も増えているが、関係性の希薄化や業務量増大の懸念があるため、対面相談とのバランスを保つことが今後の課題である。

◆実施状況

委託中児童・家庭への支援

項目	立川	八王子
家庭訪問・来所面談	35 回	80 回
電話・LINE 等連絡	194 回	444 回（手紙・電話・学校訪問等含む）
同行支援	34 回	—
研修	3 回	4 回

ケアリーバー・アフターケア支援

項目	立川	八王子
家庭訪問	33 回	87 回
電話・LINE 等連絡	2, 898 回	3565 回
同行支援	35 回	—

4. おわりに

今年度の運営および各事業を通じ、フォスタリング業務の基盤強化と地域連携において着実な進展を遂げることができた。週 1 回のミーティング定着や事務部門との連携深化により、情報共有の精度と事務処理の効率性は向上した。また、SNS やメディアを活用した多角的な広報活動、専門学校との共同制作といった新たな試みは、里親制度の認知度を高めるだけでなく、具体的な登録申請へと繋がる実効性の高いアプローチとなった。児童相談所や各市の子ども家庭支援センターとの協働も深化発展し、事前レジュメの活用や定例会議を通じて、よりきめ細かなケース共有とマッチング支援が行える体制が整いつつある。

一方で、次年度に向けて解決すべき課題も明確になった。会議運営においては、議論の深まりや発言のしやすさに依然として課題があり、全職員が安心して意見を交わせる心理的安全性の確保と効率的な時間管理の両立が求められている。職員研修についても、特定の時期に参加が集中し現場の運営に影響を及ぼした反省から、次年度は年間調整を行い、組織全体のスキルアップを計画的に進める。また、これまでの「数をこなす広報」から、ターゲットを絞った「質の高い広報」への転換を加速させるとともに、多忙時であっても情報の網羅性と迅速さを損なわない記録体制の再構築が不可欠である。

今後は、これらの成果と反省を糧に、法人内他部署との連携を単なる交流に留めず、共通の理念に基づいた業務の標準化を推進していく。個別の家庭に寄り添う専門的な支援と、組織としての安定した運営基盤をより強固なものにし、地域における里親委託のさらなる推進と養育環境の質的向上に邁進していく。

以上